



京大広報

No. 591

2004. 6

目次

〈大学の動き〉

尾池総長の中国・香港訪問……………1722

〈部局の動き〉

化学研究所附属「先端ビームナノ科学センター」
発足記念式典の開催……………1722

〈栄誉〉

玉尾皓平化学研究所教授が紫綬褒章を受章…1723

〈寸言〉

京大らしさ 田中正人……………1724

〈随想〉

侵入種 名誉教授 杉山幸丸……………1725

〈洛書〉

ムダでないムダ 黒河宏企……………1726

〈話題〉

京都大学未来フォーラム（第2回）を開催…1727

〈訃報〉

……………1728

〈日誌〉

……………1729

〈公開講座〉

数理解析研究所数学入門公開講座……………1730

理学研究科数学教室公開講座

「現代数学展望」……………1730

霊長類研究所公開講座「霊長類の進化」……………1731

〈お知らせ〉

百周年時計台記念館歴史展示室企画展……………1731

「総合体育館附属プール」の夏季利用……………1732

「白馬山の家」の夏季・秋季開設……………1732

「白浜海の家」の利用……………1733

本部構内各出入口（門）の開閉時間の

変更について……………1733

第6回生命科学研究所シンポジウム……………1734

京都大学未来フォーラム（第4回）……………1734

第4回 京大サロントーク……………1735

フィールド科学教育研究センター

時計台対話集会……………1735

化学研究所第7回高校生のための化学……………1736

〈編集後記〉……………1736

テーマ
「現代の混乱について
— 仏教はどうみるか —」
講師 叡山学院院长・比叡山春門庵住職
堀澤祖門氏

参加費無料

平成16年7月9日(金)
18時～19時30分(開場17時30分)
京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール

京都大学
未来フォーラム(第四回)



京都大学フィールド科学教育研究センター
公開講座 2004

森のくみり 森とくらす

プログラム
7月29日(木) 森へのプロローグ(講義)
7月30日(金) 森の探検と森林浴
7月31日(土) 森からのめぐみ(講義)

かたじけなく
東谷 一将 (書家・随筆家)
林 江津子 (村人・随筆家)
中野 道夫 (元信州大学教授)
ウベ・ワルター (大衆文化研究者)

問い合わせ先：農学研究科等教育・研究
協力課 TEL：753-6411

大学の動き

尾池総長の中国・香港訪問

尾池和夫総長は、入倉孝次郎副学長とともに4月22日に中国広東省深圳で開催された東アジア研究型大学協会（Association of East Asian Research Universities：AEARU）第14回理事会に出席した。

AEARUは、その名の示すとおり地域的・文化的な類似性を共有する東アジアの主要な研究型大学コンソーシアムで、香港科技大学と浦項工科大学（韓国）の提唱により1996年に結成された。現在17大学が参加。我が国からは、本学のほかに筑波大学、東京大学、東京工業大学および大阪大学が加盟している。京都大学は、本年1月から2年の任期で理事会メンバーに加わった。

理事会は中国科技大学（議長校）、香港科技大学、韓国科学技術院、国立台湾大学および本学の5機関で構成され、前年度事業の実施報告ならびに2004/05年度の事業計画が確認された。この理事会において、2005年に京都で第16回理事会とワークショップを開催することが合意された。

また、尾池総長は、翌23日に香港科技大学と香港大学を訪問し、学長ほか関係者と学術交流に関する意見交換を行った。

このたびの中国・香港訪問において、各大学から本学に対し学術交流協定締結の積極的な申し入れがあった。東アジア地域の主要大学と提携することは意義があると考えられるので、国際交流委員会において検討を進めることになる。



4月22日に開催されたAEARU第14回理事会出席中の尾池総長と入倉副学長（中央はCHEN国立台湾大学長）
於：深圳 五洲賓館

部局の動き

化学研究所附属「先端ビームナノ科学センター」発足記念式典の開催

4月24日（土）に化学研究所附属先端ビームナノ科学センター発足記念式典が化学研究所共同研究棟にて開催された。

同センターは、附属原子核科学研究施設と構造解



析基礎研究部門Ⅰ・Ⅱが連携して、各種ビームの融合科学の実現を目的として発足したものであり、化学研究所として三つ目のセンターとなる。

記念式典は、午前10時半から約1時間にわたって行われた。まず高野幹夫化学研究所長より、センター発足の経緯について説明があり、続いて祝辞が、辻文三理事・副学長、笹尾登大学院理化学研究科長、富田博之大学院人間・環境学研究科長、山田聰放射線医学総合研究所加速器物理工学部長、イゴールメシコフロシアドブナ連合原子核研究機構理事の各氏から述べられた。

その後、野田章先端ビームナノ科学センター長よりセンターの概要と組織が紹介された。土曜日に

もかかわらず、所内外から多くの方々の参加をいただき、終始和やかなムードの中で式典は終了した。

引き続き、宇治地区生協会館にて記念祝賀会が行われ、井澤靖和大阪大学エネルギー学研究センター

長、松本 紘生存圏研究所長、竹腰秀邦名誉教授、向山 毅名誉教授からの祝辞とともに、センター発足を祝った。

(化学研究所)

荣誉

玉尾皓平化学研究所教授が紫綬褒章を受章

このたび、我が国学術の発展のため顕著な功績を挙げたことにより、玉尾皓平化学研究所教授が平成16年4月29日に紫綬褒章を受章されました。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

玉尾皓平教授は、昭和40年京都大学工学部合成化学科を卒業、同大学大学院工学研究科に進学、同46年に博士課程を修了された。昭和45年4月に京都大学工学部助手、同61年助教授となり、平成5年に京都大学化学研究所教授に昇任、現在に至っている。大学院工学研究科物質エネルギー化学専攻の協力講座として物質変換科学講座合成反応設計分野を担当し、大学院生の教育、後進の研究者の育成に鋭意努力されている。平成12年から今年度まで文部省中核的研究拠点プログラム（14年度からは文部科学省の特別推進（COE）に改称）「京都大学元素科学研究拠点」研究代表者を、また平成12年から2年間は化学研究所長、平成15年からは化学研究所附属元素科学国際研究センター長を務められており、研究と大学の管理・運営の両面で多大な貢献をされている。また、日本学術会議化学研究連絡委員会委員、文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術審議会専門委員などを歴任し、日本の学術研究の発展にも大きく寄与してこられた。

玉尾教授は一貫して「元素の本質的特性に着目した物質創製」を基本概念とした元素科学研究をおこ



なっている。昭和47年に熊田 誠教授（当時）と開発されたニッケル触媒クロスカップリング反応による新規炭素-炭素結合形成法は「熊田-玉尾反応」として知られている。本手法は触媒的クロスカップリング反応という一大分野の礎となるものであり、今日の物質創製に不可欠な手法として広く応用されている。また、炭素-ケイ素結合の過酸化水素酸化によるアルコール合成法の開発、官能性ケイ素アニオン化学の開拓・確立、ケイ素を含む環状化合物シロール類の簡便合成法の開発とエレクトロルミネッセンス（EL）素子への応用など、有機合成化学から新機能性物質科学に亘る幅広い分野の科学技術の発展に多大な貢献をされている。

これら一連の業績が高く評価され、平成11年には日本化学会賞、平成14年にはアメリカ化学会 F. S. Kipping 賞、平成15年には朝日賞など国内外を問わず数々の賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

(化学研究所)

寸言

京大らしさ

田中 正人



京都大学が国立大学法人となり、新しい時代を迎えました。京大が「知の創造」に向けて、京大らしさを存分に発揮するときが来ました。人を育てる、価値のある研究を行うという社会の期待に応えるには、このような人物にこそ来てほしいという大学の意志を、より明確に打ち出すことが望ましい。入学試験においても、少子化で、受験生が減少することを危惧し、受験科目を減らしたり、簡単にしようとする流れに、合わせる必要は全くありません。

京大の数学の入試問題を初めて見たときに感じたのは、「正四面体の頂点の一つから…」といった証明問題で、他大学であれば、初めから頂点に A, B, C, D とふってあったり、座標軸が設定されていたり、ご丁寧に (1) (2) (3) と問題を小分けして答えに誘導したりする中で、敢えて余計なことを一切省いた出題の清雅な佇まいでした。この問題は、デカルトの考え、ユークリッドの考え、或いは自分のやり方があれば、それで解いても一向に構いませんという態度です。採点には何倍もの労力を要しますが、あく迄、学生を考える人としてとらえる、懐の深さを感じます。

採点する側の効率第一に走った設問では、本質を掴み、方法を選んで解決する力や、新たな問題を設定する力が乏しい、いわゆる、スキルだけの学生でも良いことになってしまいます。

京大で学ぶ何よりの魅力は、考える力を涵養する良質の場と時間が与えられるということです。好奇心に導かれ、或いは、問題意識に突き動かされて、なんとしても課題を解決しようとする意志にとって、集中し、持続して考えることのできる格好の舞台です。

考えることにとって、京都という町は、好適の地です。美しい自然に囲まれたなかで、活気のある暮らしが営まれている町。時に磨かれた心なごむ景色をここかしこに眺めながら、ゆっくり散歩できる町。

都会人たる京の住人が、考える人をほうっておいてくれるのも有り難い。そればかりか、「学生はん」と、期待し大切にしてくれる雰囲気も、当たり前と思っただけは罰があたる。ふだん何気なく接している人に、美術館や博物館で声をかけられ、どうしてこんな所でと驚くのは、こちらの思い上がりで、ごく普通に見えていた人が、実は良質の仕事をごなし、優れた美意識の持ち主であるのは、京都では珍しくない。現在に生きる人がそうであれば、この街に蓄えられてきた文化の厚味、様々なジャンルにうず高く積み上げられてきた先人の仕事の成果にふれ、その輝きと膨大な情報量に驚き、あきれ、うちのめされることも。それ迄の「知ってる、知らない」という観点で優位を競っていたことが色あせて見え、時代がもてはやしている事象も何ぼのものかと思当がつく。京都には、太い時間の軸が通っている。自分には何ができるのか、短い一生に何をすべきか、悩み考え抜くのも、京ならでは。

考え抜くことが常となれば、理科の入口から入ろうが、文科の看板を掲げていようが、道具の違いはあっても、考える者同士、話が通じます。京大の良さは、本部が街の中にあり、分野の異なるもの同士が、知的な交流をし易いことです。最先端の知見や技術も、それを使って良いのか、どう役立てたら良いのか、哲学、倫理等の側からソリューションが出てこなければ危うい。問題を提起し、解決の方向づけを行い、延いては、新しい知の体系を作り上げるには、この環境は得難いものです。

幾多の困難が予見される世界の中で、果敢にそれに立ち向かい解決につとめる気概のある人材を育てる大学。科学技術を人類の幸福に結びつける知の体系を生み出す大学。世界を見渡したとき、それができるのは京都大学であると自他共に認める存在へ、STEP BY STEP 泰然として進まれんことを、切に願っております。

(たなか まさと 株式会社菓匠三全常務取締役
昭和54年工学部卒)

随想

侵入種

名誉教授 杉山 幸丸

関西に在住の方ならご記憶だろうが、日本の森には生息していないはずのタイワンザルが、300頭ほど和歌山に生息しているのが問題になり、その措置について数年前からたびたび報道されてきた。こ



との起こりは次のようなものだった。終戦直後に廃園になった市内の私設動物園から、故意でか過失でか不明だが、逃げ出した15-6頭のタイワンザルが近隣の森で繁殖を重ね、約300頭にまで増えている。しかも、距離をおいて生息しているニホンザルとの間に雑種までできている。双方のハナレザルが遺伝子をまき散らしているらしい。このまま拡大を続けると手のつけようがなくなる。ニホンザルを駆逐して日本の森のかなりの部分をタイワンザルとその雑種が占領することにもなりかねない。そこで、今のうちに全頭捕獲しようということになった。そこまではよかったのだが、捕獲・隔離したタイワンザルを殺処分にするという案に市民から強い反対の声があがった。「人間が勝手に増やしておきながら、殺すなんてかわいそうだ」。しかし、全頭死滅するまで隔離して飼育するには、今後25年以上にわたって総額11億円ほどかかる、その費用を県民が負担するのか。それに、閉鎖空間に閉じこめることもサルを苦しめることである。生かしておけばいいというものでもない。無人島に放そう、外国の動物園に引き取ってもらおう、等と議論続出したがいずれも可能性のない話で、結局殺処分に決まった。

そもそも人為的に持ち込まれた侵入種（または外来種）を排除しようというのは、新天地に適応した侵入種が在来種を駆逐し、絶滅させたり生態系を破壊するおそれがあるとの考えからである。自然が作った生物の多様性を人為的に攪乱した場合、どんな事態が起こるか予測不能な場合がある。在来の魚たちを駆逐しつつある琵琶湖のブラックバスはその危険な例である。それぞれの土地に合わせて自然が

生み出した生物の多様性を、次の世代に引き継がなければならないという考えである。

議論の最中に私は関西のあるテレビのニュース番組に引っ張り出された。そこでキャスターから出された質問。「尻尾の長いサルに置き換わったらどうしていけないのですか」。

タイワンザルのほうが少し体が大きく、尻尾が長いだけ。ニホンザルとは近縁で外見もよく似ている。だからこそ簡単に雑種ができる。「日本の風土に合ったニホンザル」などという情緒に訴えてもだめだと思ったので、私は次のように説明した。「50年ちょっとで20倍に増えたということは大変な繁殖力。このことは、森からそれだけ多くのエネルギーを吸い取るということ。つまり、30-40万年もの間バランスのとれてきたニホンザルと日本の森の関係が崩れて、森林全体を荒廃させることにもつながりかねないのです」。

人間では決して否定されていない混血が動植物ではどうしていけないのか。なぜ殺してまで侵入種を完全排除し、純系を守らなければならないのか。なぜ生物界は多様でなければいけないのか。「尻尾の長いサル」の疑問は、じつはこんな重い問題に通じていたのである。

誰をも納得させられる簡潔な答えはないものかと考えあぐねていた私は、その思考が泥沼に落ち込んで行くのに気づいた。そこに住んでいた人々を追いつ出して自分たちのなわばりを造り、さらに力で拡大していく人間たちもまさに侵入種ではないか。生物界にはそれなりの方策を考案して生き延びてきた弱い種、身体の小さな種、強力な武器を持たない種もたくさんある。互いにバランスをとってすみ分けを実現している近縁種共存の例もある。だからこそ生物界は多様性が維持されてきたのである。人間にできないはずはないと考えるべきか、あるいは、人間だからこそできないのか。

(すぎやま ゆきまる 元霊長類研究所長 平成11年退官、専門は人類学・生態学)

洛書

ムダでないムダ

黒河 宏企



東山ドライブウエーを上
がった花山天文台では、柔ら
かい新緑が濃い緑に変わろう
としている中で、鶯のさえず
りが響き渡っている。ここで
は蟬の鳴き出す7月中旬まで、
鶯の声が聞かれる。新緑と言
えば、飛騨天文台構内ではこ
れからが本番である。先週の5月12~13日に行った
時には唐松から一斉にうぶ毛のような新緑が吹き出
していた。北アルプスの懐に抱かれた飛騨天文台の
1年で何時が一番かと聞かれると、太陽観測には夏
で、きれいなのは新緑の候と、迷わず答えている。
ちなみに、飛騨の山で雪解けを待ちかねたようにま
ず咲くのは「こぶしの花」である。まるで雪の白さ
をもらって咲くかのような。それから、里では
梅と桜と桃がほぼ同時に咲く。その後、笠ヶ岳に白
馬が現れる。白馬と聞くと信州の白馬岳を想う方が
多いであろうが、飛騨ではこの時期にだけ白馬が現
れるのである。早すぎても遅すぎても簡単にはそれ
と見えない。写真の日付は今年の5月6日である。
昨年10月に長尾前総長に来て戴いて開所を祝った
太陽磁場活動望遠鏡 (SMART) の右に見えるのが
笠ヶ岳である。その頂上付近に白馬を見つけていた
だけのはずである。長い首から下にすくっと伸びた
前足、背中から続く少し大きめの丸い尻、耳もあり、
顔はこちらに振り向いている。「昔はこの白馬が見
えると糶を蒔いた」と村の古老に聞いた。

花山天文台と飛騨天文台は理学研究科に附属する
教育研究施設である。5年前に70周年、6年前に30
周年とそれぞれ記念式典を行った。飛騨は観測の前
線基地として、花山はデータ解析と学生の観測実習
を中心にして、互いに相補的に教育研究に当たって
いる。私は18年間の飛騨勤務から、8年前に京都に
戻ったが、観測屋なので今も月に1~2回程度飛騨
へ出かけている。皆さんも是非一度美味しい空気を
吸いにお出かけ下さい。

花山と飛騨は最近社会貢献でも大いに競い合うよ
うになった。飛騨天文台ではもともと教育関係者を
はじめとして、熱心なグループの見学依頼には出来
るだけサービスして来たが、9年前の夏からは、村
民向けの一般公開も始めた。また秋には全国的に公
募して、「太陽宇宙活動デジタルライブ」と銘打った



花山・飛騨天文台同時一般公開も行っている。花山
天文台でも、5年前に一般公開を思い切って開始し
た。思い切ってというのは、常勤の教員が二人しか
いないので、いささか不安であったからである。結
果は予想を超える盛況であった。大学院生やポスド
ク研究員、非常勤職員の諸君が色々な趣向を凝らし
てくれた。ゼミの学部学生や、東京の研究室へ移っ
た学生まで手伝いに来てくれた。去年は天候に恵ま
れなかったが、それでも約500人の見学者が訪れ、案
内するスタッフも50人を数えた。一昨年には常設の
天文台歴史館もスタートさせた。天文台の古い望遠
鏡や観測装置や資料を展示している。天文台の下の
鏡山小学校からの見学も可愛い年中行事の一つと
なった。100人位の2年生が「丘の上の天文台」とい
う歌詞の出でくる校歌を毎年なかなか元気に歌って
くれる。2年前から高校生も来るようになった。夏
休みの1週間を利用した洛東高校生の太陽観測研究
である。これらについても若い諸君の活躍が大きい。
時間のムダに見えるが彼らにも良い経験になってい
ると思う。大学が真理を追究しながら社会にも喜ん
でもらえれば、こんな嬉しいことはない。最後にも
う一つのムダを書いてこの落書きを終わりたい。社
会・政治・宗教問題について議論したり行動するム
ダを楽しむ学生を如何に増やすか？このようなムダ
を経験した学生を社会はいつも必要としているので
はないか？これは現在の我々にとって最も難しい社
会貢献のテーマかも知れない。天文学者がこんな難
しいことを考えるのはムダかも知れない。その意味
で今年から始まった京大フォーラムには期待してい
る。講演だけではなく、パネラーを囲む討論会に学
生や市民が参加する場がもっとあれば、なお良いと
思う。

(くろかわ ひろき 大学院理学研究科教授)

話題

京都大学未来フォーラム（第2回）を開催

京都大学では、大学と社会との協力・連携を一層深めるため、企業や官庁、国際機関、NGO、大学・研究機関、マスメディア、文化・芸術など様々な分野で活躍する卒業生を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムを今年4月からおよそ月1回のペースで開催することになり、5月14日夕刻にこのフォーラムの第2回目を、百周年時計台記念館・百周年記念ホールにおいて開催した。

今回は、文学部卒業で、ジャーナリストとして活躍されている鳥越俊太郎氏を講師に招き、尾池和夫総長の挨拶の後、「イラク戦争の現場」と題して講演が行われた。講演の初めに、クラブ活動に熱心なあまり長く学生生活を送ることになったことについて

ユーモアを交えて話され、学生生活についても多様な形があることを参加した学生の皆さんに語られた。本題の講演では、イラクでの取材現場の様子や誤爆の犠牲になった少年たちへのインタビューの内容、意外と知られていないイラクの豊かさなど、実体験に基づいたお話があり日本や欧米でメディアより報道されている内容と現地での実状に違いがあることを語られた。聴講した学生、教職員、一般市民の方々420名は実体験を交えた講演に真剣に聞き入り、講演終了後は参加者から、イラクの将来や日本の役割、メディアの責任など熱心な質問が相次ぎ、大変有意義なフォーラムとなった。



訃報

このたび、^{たまだ こう}玉田 琬名誉教授、^{の だまたお}野田又夫名誉教授、^{やまだとしろう}山田敏郎名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

玉田 琬 名誉教授



玉田 琬先生は、4月12日逝去された。享年88。

先生は、昭和15年大阪帝国大学理学部物理学科を卒業、京都大学理学部助教授、大阪市立大学理工学部教授等を経て、同31年京都大学工学部教授に就任され、航空工

学科空気力学講座、その後流体力学講座を担当された。昭和54年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は大阪産業大学教授および同大学工学部長を務められた。

先生は、高速空気力学、粘性流体力学、電磁流体力学に関する理論的研究で優れた業績を残され、そ

の発展に多大の貢献をされた。なかでも、翼を過ぎる遷音速流の研究では、遷音速域でも翼面に衝撃波が生じない「玉田翼」の発見など世界をリードする研究成果をあげられ、これらの功績により昭和55年日本学士院賞を受賞された。

また、科学技術庁航空技術審議会専門委員、日本学術会議力学研究連絡委員会委員、日本航空宇宙学会関西支部長、流体力学懇談会（現日本流体力学会）運営委員長等を歴任され、学界の発展に尽くされた。

これら一連の功績により、昭和62年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

（大学院工学研究科）

野田 又夫 名誉教授



野田又夫先生は、4月22日逝去された。享年93。

先生は、昭和8年京都帝国大学文学部哲学科を卒業、同大学大学院を退学後、大阪高等学校教授、京都大学文学部

助教授をへて昭和28年同教授に就任、当初哲学・哲学史第二講座（西洋哲学史）を、次いで同第一講座（哲学）を担当された。昭和49年停年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、関西哲学会委員長などを務められ、また本学退官後は、関西学院大学教授、甲南女子大学教授を歴任され、わが国の哲学の発展に尽力された。

先生は、戦後の日本の哲学・哲学史研究の分野で

一貫して主導的な役割を果たされ、なかでもデカルト、パスカル、カントなど、西洋近代の代表的な思想家に関するもっとも権威ある歴史的研究を発表するとともに、そのような哲学史的考察を踏まえて、現代哲学の諸問題についても積極的な理論的洞察を発表された。その業績は『野田又夫著作集』全5巻に集約されている。さらに、客員研究員としての海外での講義や国際研究雑誌の編集への参与などを通じて、日本の哲学的伝統についての明快な紹介を行うと同時に、多くの研究者との交流をはかり、わが国の哲学研究の国際化に多大な貢献をされた。

以上の業績に対して、昭和50年に紫綬褒章、昭和56年には勲二等瑞宝章を受けられた。

（大学院文学研究科）

山田 敏郎 名誉教授



山田敏郎先生は、5月12日逝去された。享年84。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部機械工学科を卒業、同大学工学部講師、日本輸送機株式会社勤務、岡山大学教授を経て昭和43年京都大学工学部教授に就任、一般材料力学講座を担当された。昭和57年新居浜工業高等専門学校校長就任のため本学から転出され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和45年4月から同56年7月まで国立大学協会の第一常置委員会、大学運営協議会委員として、国立大学が直面する諸課題の解決に尽力された。

本学転出後は、昭和57年7月から同63年3月まで新居浜工業高等専門学校校長を務められた。

先生は、金属材料の疲労強度、信頼性工学、変形・特殊加工ならびにファインセラミックスの強度評価等の各研究分野において多数の独創的かつ先駆的な研究業績を残され、それらの各分野において多大の貢献をされた。

また、日本材料学会副会長、日本学術振興会将来加工技術136委員会委員長等の要職を歴任された。

これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成5年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

日誌 2004.4.1 ~ 4.30

- | | | | |
|------|-------------------------------------|-----|---|
| 4月1日 | 役員会
教育研究評議会（第1回）
教育研究評議会（第2回） | 21日 | 国際交流委員会
総長、香港、中華人民共和国を訪問（24日まで） |
| 2日 | 経営協議会
学生部委員会 | 22日 | 人権問題対策委員会 |
| 5日 | 名誉教授称号授与式
役員会 | 23日 | 同和・人権問題委員会
入学者選抜方法研究委員会 |
| 7日 | 入学式
大学院入学式 | 26日 | アメリカ合衆国 Ricard Gonzalez ミシガン大学心理学部長他4名来学、総長他と懇談 |
| 12日 | 名誉博士称号授与式
役員会 | 27日 | 企画委員会 |
| 20日 | 施設整備委員会
部局長会議 | 28日 | 財務委員会
環境保全委員会 |

公開講座

数理解析研究所数学入門公開講座

1. 期 間：8月2日(月)～8月5日(木)
(8月6日(金)に、各講師に自由に質問・討論できるオフィスアワーを設けました。)
2. 時 間：毎日 10:30～16:00
3. 場 所：数理解析研究所4階大講演室
4. 演題及び講師：この結び目はほどけるか？ 助教授 大槻 知忠
円周率の公式と計算法 助 手 大浦 拓哉
不変式の話 教 授 向井 茂
5. 定 員：120名(先着順)
6. 受 講 料：7,200円
7. 受 付 期 間：6月10日(木)～7月5日(月) 17:00(必着)
8. 問い合わせ先：数理解析研究所 総務掛 「数学入門公開講座」係
TEL:753-7202 FAX:753-7272
E-mail:kouza@kurims.kyoto-u.ac.jp
詳細は数理解析研究所ホームページをご覧ください。
URL <http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~kenkyubu/kokai-koza/index.html>

理学研究科数学教室公開講座 「現代数学展望」

1. 期 間：8月9日(月)～8月11日(水)
2. 時 間：各日(3日間共) 10:00～17:00
3. 場 所：理学研究科3号館109講義室
4. 演題及び講師：連分数と力学系 教 授 宍倉 光広
パイの超越性 助教授 並河 良典
多角形と曲面の幾何学 助教授 藤井 道彦
5. 応 募 資 格：数学教育関係者及び現代数学に興味のある高校生以上の方
6. 定 員：50名(申込みが定員を超過した場合は抽選による)
7. 受 講 料：8,200円(受講決定通知後に受講料を納入願います)
※以前とは異なり銀行振込に変わります。
8. 申 込 方 法：(1)受付期間：6月1日(火)～7月10日(土)
(2)手 続：官製往復ハガキに次の事項を明記すること(申込みは1名につき1枚とする)
1.氏名 2.住所・電話番号 3.年齢・性別 4.勤務先又は学校名 5.受講目的
※返信ハガキ宛名にも住所・氏名を記入すること
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科数学教室「公開講座」係 TEL:753-3700
詳細は理学研究科数学教室ホームページをご覧ください。
URL <http://www.math.kyoto-u.ac.jp/koukai.html>

霊長類研究所公開講座 「霊長類の進化」

1. 日時・場所：8月19日(木) 講義 10:00~17:50
 於 犬山国際観光センター“フロイデ”(愛知県犬山市松本町4-21)
 20日(金) 実習・質疑応答 10:00~16:10
 於 霊長類研究所(愛知県犬山市官林)
2. 演題及び講師：「マカクザルの進化:アジアで人類とともに生きて」 助教授 濱田 穰
 「日本社会と霊長類の保全生物学」 助教授 渡邊 邦夫
 「チンパンジーの遺伝子不毛地帯」 助教授 平井 啓久
 「野生チンパンジーの暮らしと彼らの森をまもる試み」 教授 松沢 哲郎
 実 習：骨学 助手 毛利 俊雄
 心理学 助手 田中 正之
 サルの野外行動観察 助教授 渡邊 邦夫
 分子遺伝学 助手 浅岡 一雄
3. 受講料：7,200円
4. 申込締切：7月12日(月)
5. 問い合わせ先：霊長類研究所 総務掛 TEL:0568-63-0512 E-mail:shomu@pri.kyoto-u.ac.jp
 申込方法等、詳細は霊長類研究所ホームページをご覧ください。
 URL <http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/index-j.html>

お知らせ

百周年時計台記念館 歴史展示室企画展 「創立期の京都大学 ～初代総長木下広次を中心に～」

大学文書館では、百周年時計台記念館の歴史展示室の一角を使用して京都大学の歴史を様々な角度から照らし出す企画展を行います。

その第1回として、「創立期の京都大学～初代総長木下広次を中心に～」を開催します。初公開の木下広次関係資料を主に使い、創立期の京大の一側面と、「自由の学風」の基礎を築いたとされる木下初代総長の人となりを展示します。

開催要領は以下のとおりです。

- 日 時：6月1日(火)～30日(水)
 9:30～17:00(休館：月曜日)
- 場 所：百周年時計台記念館1階 歴史展示室
- ※入場無料



「総合体育館附属プール」の夏季利用

総合体育館附属プールを下記の期間・時間にかぎり、本学の学生及び教職員向けに開放します。

1. 期 間：7月1日（木）～8月31日（火）
（この間40日程度）開放日については後日掲示にてお知らせします。
2. 時 間：12：00～14：00
3. 対 象：本学の学生及び教職員（学生証・職員証を呈示）
4. 問い合わせ先：学生部学生課（西部構内総合体育館内、電話学内 2590）
5. そ の 他：利用にあたっては、必ず水泳帽を着用願います。

（学生部）

「白馬山の家」の夏季・秋季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白馬山の家」を、今年度からは秋まで延長して開設します。この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓^{つがいけ}の梅池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、夏は暑さを逃れ避暑地として、また秋は山々を染める紅葉が満喫できます。近くにはロープウェイを備えた梅池自然園や塩の道、また、小谷温泉をはじめ温泉もたくさんあります。

建物は山小屋風の木造地上2階地下1階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室からなっています。

1. 名 称：京都大学白馬山の家
2. 所 在 地：長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869の2
（交通機関）JR大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親の原」下車、徒歩20分
車の場合 長野自動車道 豊科ICから約1時間30分
北陸自動車道 糸魚川ICから約50分
3. 開設期間：7月10日（土）～10月31日（日）
4. 収容人員：26名
5. 所要経費：1人1泊 使用料120円、ほかに食費等実費1,700～2,300円）
6. 申し込み及び利用に関する詳細：

体育会事務室（西部構内総合体育館内、電話学内 2574）に照会してください。

（学生部）

「白浜海の家」の利用

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白浜海の家」を、下記のとおり1年を通じて開設していますので、ご利用ください。

この施設は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、温泉はもちろん施設の前はすぐ海！海水浴に最適のところです。

また、「海の家」のある瀬戸臨海実験所の構内には、500種以上の海の生物を集めた「京大白浜水族館」があり、近くには「南方熊楠記念館」もあります。(いずれも有料)

1. 名称：京都大学白浜海の家
2. 所在地：和歌山県西牟婁郡白浜町 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所構内
(交通機関) JR紀勢本線「白浜駅」下車，明光バス「明光バス本社前」行きに乗車，終点で「臨海」行きバスに乗り換えて，「臨海」で下車。
車の場合は 阪和自動車道・海南湯浅道路 みなべICから約1時間
3. 開設期間：通年開設 (12月29日～1月3日を除く)
4. 室数：和室3室
5. 収容人員：30名
6. 所要経費：1人1泊 使用料130円，ほかに食費等実費 (1泊2食，2,000～2,600円)
7. 申し込み及び利用に関する詳細：
体育会事務室 (西部構内総合体育館内，電話学内 2574) に照会してください。

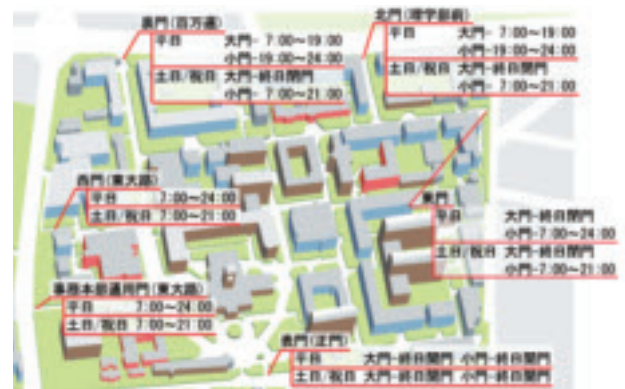
(学生部)

本部構内各出入口 (門) の開閉時間の変更について

5月25日 (火) より表門 (終日開門) を除く5カ所の門について，平日は7時から24時まで土・休日は7時から21時まで人の出入りができるようになりました。

なお，建物管理の徹底 (建物および各部屋の施錠等) において，これまでご留意いただいているところですが，今後より一層徹底いただきますようお願いいたします。

(財務部資産管理課)



第6回生命科学研究科シンポジウム

1. 日 時：6月30日（水）9：30～17：50
7月1日（木）9：30～17：40
2. 場 所：京大会館210号室
3. 演題及び講師：（27研究分野の教授等が講師として行います。）
- | | | |
|-----------------------------|-----|-------|
| 「Chromatid から Chromosome へ」 | 教 授 | 柳田 充弘 |
| 「神経伝達の制御と脳機能」 | 教 授 | 中西 重忠 |
| 「光合成炭素代謝のメタボリックエンジニアリング」 | 教 授 | 泉井 桂 |
| 「免疫応答制御と樹状細胞」 | 教 授 | 稲葉 カヨ |
- ほか
4. 参 加 費：無 料
5. 申 し 込 み：不 要
6. 問 い 合 わ せ 先：理学研究科等総務掛（生命科学研究科担当）
TEL：753-3967・9249
E-mail：matsumura@rigaku.kyoto-u.ac.jp
詳細は生命科学研究科ホームページをご覧ください。
URL <http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/symp>

京都大学未来フォーラム(第4回)
「現代の混乱について ー仏教はどうみるかー」

1. 日 時：7月9日（金）18：00～19：30（開場17：30）
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
3. 講 師：叡山学院院长・比叡山泰門庵住職 堀澤 祖門 氏
4. 定 員：先着500名
5. 参 加 費 用：無 料
6. 対 象：学生・教職員及び一般の方々
7. 申 し 込 み：百周年時計台記念館ホームページ申込フォームまたは往復はがきにて下記までお申し込みください。
- なお、往復はがきによる申し込みについては、「第4回未来フォーラム参加」と明記の上、住所、氏名、年齢、職業、連絡先を記入し、返信はがきには、必ずご自身の宛先を記入してください。
8. 問 い 合 わ せ 先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町
百周年時計台記念館事務室
TEL：753-2285（月～金曜日 9：00～17：00）
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/11-top.htm>

第4回 京大サロントーク

1. 日 時：7月13日（火）18：00～19：30
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 京都大学サロン
3. 講 師：工学研究科 高松 伸教授
4. 対 象：学生・本学の教職員および学生
5. 定 員：45名
6. 参 加 費 用：飲みもの代として入場の際、500円をいただきます。
学生の方は無料（飲みものなし）で入場できます。
7. 申し込み方法：下記のホームページアドレスよりメールにてお申し込みください。
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/11-top.htm>
参加については、メールにてお知らせいたします。
8. 問い合わせ先：百周年時計台記念館事務室 TEL：753-2285
E-mail：Kinen52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

フィールド科学教育研究センター時計台対話集会 「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」

1. 日 時：第1回対話集会 7月17日（土）13：30～16：00
第2回対話集会 7月24日（土）13：00～17：30
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
3. 演題及び講師：第1回対話集会
「森を築いて海を思う」 C.W.ニコル（作家、アフアンの森財団代表）
第2回対話集会
「海の恵みに森を思う」 畠山 重篤（牡蠣の森を慕う会代表）
「渚から森と海を思う」 田中 克（フィールド科学教育研究センター）
「海の再生のために森里海を思う」 寺島 紘士（財団法人 シップ・アンド・オーシャン
財団 海洋政策研究所）
「森と海をつなぐ里の文化」 梅本 信也（フィールド科学教育研究センター）
「森と海を結ぶ文明論」 安田 喜憲（国際日本文化研究センター）
4. 申 し 込 み：必要（申し込みは、お電話・FAX・E-mailでお受けします。）
5. 定 員：第1回、第2回ともに500名（残席わずかです）
6. 参 加 費：無料
7. 問い合わせ先：フィールド科学教育研究センター 企画情報室
TEL：753-6414・6415（月～金；9：00-17：00） FAX：753-6451（24時間）
E-mail：joho@kais.kyoto-u.ac.jp（Subject；「対話集会申込」）
詳細はフィールド科学教育研究センターホームページをご覧ください。
URL <http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/>

化学研究所

第7回高校生のための化学—化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会—

1. 日 時：7月31日（土）10：00～16：30
2. 会 場：京都大学宇治キャンパス 化学研究所共同研究棟大セミナー室など
〔交通〕JR奈良線または京阪宇治線「黄檗 おうばく」駅下車，徒歩7分
3. 対 象：高校生および中学生，教員等
4. 参 加 費：無料
5. 定 員：約150名（ただし，研究現場の紹介と見学のサイトそれぞれの定員が先着順約30名なのでご希望に添えない場合もあります）
6. 参加申込方法：氏名，所属，連絡先住所・電話番号，訪問を希望する見学サイト2カ所（午前中のサイトAM1～AM6のうちの1カ所および午後のサイトPM1～PM6のうちの1カ所）を記して，ホームページ，電子メール，葉書，またはFaxで下記までお申し込みください。折り返し，連絡を差し上げます。
7. 申 込 期 日：7月16日（金）必着
8. 申 込 先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄
京都大学宇治地区事務部研究協力課 講演委員会
TEL：0774-38-3353 FAX：0774-38-3399
E-mail：kenkyo@uji.kyoto-u.ac.jp
詳細は化学研究所ホームページをご覧ください。
URL <http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/seminar/apply.phtml>

編集後記

私の3階の実験室から北東を望めば，東山，比叡遠くにかすんで比良，それらの山の緑を背景に，時計台，工学部の高層校舎，総合人間学部の教会風建物が見える。特に雨上がりの夕刻，霞に映えた大学の姿は美しい。10年来この実験室からの眺めを楽しんできた。そして，大学の姿が年々変化していくのを目の当たりに感じている。京都大学が国立大学法人となつてはや3月が過ぎようとしている。昨年度3月末までの鳴動は何だったのかと思う程，学内は一見落ち着いている。しかし，大学がその容姿を大きく変えつつあるように，水面下で明治以来の大改革が進行しつつあるのだ。“京大広報”の役割はますます重要になる。広報委員会の一員として，改めて，身が引き締まる思いがする。

6月にはめずらしい大型台風が，稲妻のように京都をかすめて通り過ぎた。心配した大禍はなく，気づけば京都特有の蒸し暑さがあるが，それでも爽やかさを感じる夏日が訪れている。大学改革もこの台風のように行かないものかと，ふと，思った。（五十棲記）